

## 様式 F-7-1

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）実施状況報告書（研究実施状況報告書）（平成24年度）

1. 機関番号	3   2   6   0   4	2. 研究機関名	大妻女子大学																									
3. 研究種目名	基盤研究(C)																											
4. 補助事業期間	平成23年度～平成26年度																											
5. 課題番号	2   3   5   2   0   0   5   8																											
6. 研究課題	近世中国におけるムスリムの「釈疑」言説の研究																											
7. 研究代表者	<table border="1"> <thead> <tr> <th>研究者番号</th> <th>研究代表者名</th> <th>所属部局名</th> <th>職名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>7   0   4   4   7   6   7   1</td> <td>サトウ ミノル 佐藤 実</td> <td>比較文化学部</td> <td>准教授</td> </tr> </tbody> </table>				研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名	7   0   4   4   7   6   7   1	サトウ ミノル 佐藤 実	比較文化学部	准教授																
研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名																									
7   0   4   4   7   6   7   1	サトウ ミノル 佐藤 実	比較文化学部	准教授																									
8. 研究分担者	<table border="1"> <thead> <tr> <th>研究者番号</th> <th>研究分担者名</th> <th>所属研究機関名・部局名</th> <th>職名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </tbody> </table>				研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名																				
研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名																									
9. 研究実績の概要	<p>金天柱が著した『清真釈疑』の本文の構成をまず分析し、ただ単純に対話形式で書かれているのではなく、対話部分が金天柱のモノlogueによる序章と終章に夾まれていてこと、戯曲形式になっていることを明らかにした。読者層を非ムスリムにおいていることが原因のひとつとかんがえられる。また、対話相手は親友である非ムスリム陳大韶である可能性がある。さらに全体の構成として、金天柱がじしんのことを指す一人称代名詞について、「予」と「余」の二通りあり、前半の第六番目の質疑応答までは「予」、第七番目以降は「余」となっている。有意な差異があるのか、今後の課題である。長樂齋版（民国10年清真書局年本）と光緒2年鎮江本のあいだには文字の異同があり、注意を要することもわかった。資料収集によってテクストクリティックが可能となったことは、これまで校勘がしつかりとなされていなかつた『清真釈疑』研究において一定の意義を有し、今後は定本作成にむけて尽力したい。</p> <p>内容分析について、金天柱は、儒家の經典を頻繁に引用しているだけではなく、儒家の倫理道德理念や儒家が理想とする社会規範にそつて生活を営んでいることを強く自負している。したがって出家や隠遁・隠逸にはじめる仏教徒、道教徒をきびしく批判するが、その際に援用されるのが「論仏骨表」をはじめとする韓愈の言説である。また、そうした理念や規範を遵守していない儒者たちにたいする非難もみられるが、その批判の論点もじつは韓愈の言説に対してであった。このように、清初のムスリムが儒者以上の儒者であることに強い矜持をもつていたこと、また仏・道批判の論拠に韓愈があげられるのみならず、儒者批判にたいしても韓愈を批判対象としていることを明らかにした。当時のムスリムにおける儒教社会にたいするまなざしの一例が看取できたことは意義があろう。</p>																											